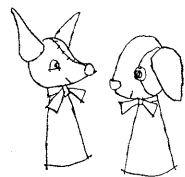


及川平治の幼稚園保育(三)

久保いと



カリキュラム改造

大正十四年三月一日、及川平治は文部省から海外出張を命ぜられ、教育事情視察の旅に出ました。欧米九ヶ国をまわり、とくにアメリカでは新しいカリキュラム構成を学んで、大正十五年七月五日に帰朝しました。

この教育視察は、及川平治に一つの転機をもたらしました。いままで生活と学習の一致を求めながらも、その不一致を解決しえないでいた及川平治は、欧米旅行において、教育調査やカリキュラム構成学を学ぶことによって、あたらしい飛躍への展望をえたのです。それは、従来の理論が依拠していた教材本位の生活指導の立場を根本的にうらがえて、生活単位法―経験

単位法によることでした。

(生活単位とは、Life Unit の訳語で、生活単元に相当します。アメリカでは、経験単位、作業単位、行為単位などということばも用いられていました)

そのころ、アメリカではカリキュラム構成についての研究がさかんで、一九二〇年代にはいつて科学的なカリキュラム研究がはじめられていました。まずカリキュラムの内容をきめる基礎として現実社会の生活活動を分析し、目標分析もおこない、さらにこれらの研究をカリキュラムに組みたてる方法が研究されていきました。ポビットやチャーターズのカリキュラム構成の研究が発表されたのはこのころです。

及川平治は、つぎのように述べています。

「最近カリキュラムの題材を組織するのに一般に思想の大単位、研究の大単位をとるようになったのは確かに善い傾向である。……このカリキュラム構成の可能性と有益性は現代心理学の原理によって明らかである。大脈絡を離れて知識の断片を学ぶことは、将来問題を解決する助けとはならぬ。且つ又旧法即ち断片的学習法では思想の連続は保持されない。……

地理・歴史・算術などと教科目を分けることを止め、新に新方案を立てるがよいという議論は大體四つある。第一の主張、

これは新しい立場をとるものであって、現代教育における生活単位は論理的基礎よりも心理的基礎を重視するからよいというのである。第二は題材の大単位を主張するもので、諸教科はその単位内に自然に応用せられるべきものである、というのである。第三は児童の興味を中心とするものであって、これを児童経験単位法と呼ぶ。最後の第四は経験の大単位は知識を大に機械的(作用的)ならしむる方法であるからよいというのである。

以上の議論を通観すると誰人も旧法即ち学科別教育法がよいと主張するものはないことが解るのである。進歩的学校では思想大単位法を余程早くから実行しているのである」

あたらしいカリキュラム改造の理論は、従来からの動的教育論をより前進させることでもありません。

すでに述べたように、及川平治は、生活指導が教育であると

考えています。「教育とは生活の価値を評定し、之を統制するを輔導するにあり」「如何なる生活が価値あるかを悟って其の価値ある生活をなすべき実力者をつくるように輔導するのが教育だといふのである。まとめて言えば生活指導が教育である」

生活——生活地位——生活様式といふ考え方については、すでに前号に述べたのでくりかえしませんが、「指導とは児童を生活地位にすえて興味必要(学習動機)を喚起し、生活様式をより良く変化せしむることである」と、いつています。

したがって、この意味における教育をていしようとするれば、学校では、子どもにどのような生活経験をさせ、それをどのように指導したらよいか、を考えていかねばなりません。けれども、教材本位の時代には、子どもははなればなれの知識の小片をあたえられ、しかもそれらのすべては試験日まで記憶させるべきものとされてきました。

「さて吾々の生活は読むだけで、又計算するだけで成立しない。たとえ旺盛な学習動機を喚起して教材に等しい題材を構成しても生活とはいえない。小鳥を飼育する場合には、小禽舎を作る手工あり、小鳥の習性を研究して遊び場菓を作る理科もあり……算術あり……修身あり……綴方……之を説明する話方もある。よって教材本位の生活指導には常に不満足を感じていた」

このようにして、ながいあいだの懸案であった生活と学習の統一という課題の解決に一步ふみ出そうとします。

では、カリキュラム改造はどのようにすすめられたでしょうか。及川は、「カリキュラムとは生活経験の系列である」と考え、カリキュラムの組織について、つぎのように述べています。

イ、わが国の教育学は、教育方法を教授・訓練・養護にわけ教授のみを扱ってきたが、重要な内容は訓練・養護である。児童の活動範囲をひろめ、その種類を多様にした生活単位を選び、これまでの特別課程を正規のカリキュラムに移さねばならぬ。

ロ、教材を既存存在と考え遊戯化しようとすれば人為的手段を弄する弊に陥る。もし発生的見解をとれば、興味中心のカリキュラムを作り得る。

ハ、旧カリキュラムは各教科目の横の連絡、同一教科内の縦の連絡を説く。教科目間に狭い学境境界線を設け、次に連絡を図る位なら始めから撤廃してはどうか。

ニ、論理的に排列した教材は、児童の興味発達の順序に併行するものでない。

ホ、教科の単位が小さくなればなるほど、生活の諸方面に関係させる便宜はあるが、実際生活とはますます離れることにな

る。新カリキュラムが大単位をとって児童の活動を多様にするゆえんである。

へ、旧カリキュラムは教材を授けんとする意向を中心として組織せられ、新カリキュラムは児童の学ばんとする意向を中心として構成する。

ト、旧カリキュラムは児童の個人差に適する教育を施し難い。

チ、旧カリキュラムの時間割は、いわゆる教授の時間割で、生活の時間割ではない。時間に仕事をあてはめるよりも、仕事に時間を適合させるがよい。かつ今の時間割は創造力の發展する機会、不得意の作業を補習する時間を予定していない。

新カリキュラムは少数の大単位をとり、一単位に数時間、ときに数日を費すことを許している。

このような原則にたつて、小学校における生活単位案は、主として低学年を中心に実践されていきました。教科別単位のばあいも、あそびをとおして展開されていきます。

たとえば、小学国語二年「ニンギョウノビヤウキ」の展開は、読本をよく読んでお医者あそびをする……人形の母から医者宅に電話をかける、または医者の方を来診を求めると手紙を書く、医者をむかえて病室におおす、医者は病状をたずね検査器を用いて診察する、紙で氷嚢をつくり用いる、くすりびんを盆にのせほこりのかからぬように布をかける、などの活動をお

して看護の知識と道徳的習慣をつくらうとしています。

幼稚園における生活単位案

では、幼稚園ではどのような保育がなされていたでしょうか。

大正十年四月二十九日に幼稚園令が公布されました。『教育並保育概覧』にかかれてある「幼稚園保育信条」には幼稚園令の影響をうけて、「幼稚園令第一条ニ拠リ心身ノ発達程度ニ適応シテ幼児ヲ保育シ之ヲ健全に発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シテ国民的宗教的性情ノ啓培ニ資シ克ク文部省訓令第九号ノ趣旨ニ従ヒ社会事情ノ複雑化セルニ鑑ミ努メテ家庭教育ニ裨補スルトコロアランコトヲ期ス」としてなされています。ここにかかれていいることばの意味には、きわめて深重なものがあります。大正から昭和にかけての社会状況は、第一次世界大戦後の不況と貧富の隔差の深刻な拡大、関東大震災、昭和初期における世界的な恐慌の前ぶれ、社会不安を背にして擡頭してきた社会主義思想と、それに対する政府の弾圧、フアシズム体制への移行——ちょうどこのような危機的状況のもとに昭和は幕あけしたのです。

明石女子師範附属幼稚園は、国立の師範学校附属でしたか

ら、国の政策や統制をまともにはうける立場にありました。このような立場において自由主義的な新教育を貫くことは、しだいに困難になってきました。このことばは、そうした複雑な社会状況を背景としてかかれたものです。

しかし、そうした外に向かつて表明された保育信条とは逆に、幼稚園保育のなかみの方は、及川平治の理論の進展とともに変革されていきました。幼稚園令前後のころの保育項目は、『保育概要』によれば、唱歌・遊戯・談話・手技・観察・野外保育・露天保育となっておりますが、『教育並保育概覧』では、つぎに示すとおりプロゼクト法が採用され、自然科と人文科に大まかに分けられるようになります。

- 一、園児ハ年長部年少部ニ分ツ、各部三十名トス、保育ハ為シテ悟ル主義ニヨリ幼児ノ生活ヲ善導ス
- 一、プロゼクト法ヲ採用ス
- 一、保育課目ハ生活単位ナレドモ次ノ二大中心科ヲ設ク
- (一)自然科——自然研究ヲ中心トシテ、園芸観察ヲ行ヒ、之ニ話シ方、描キ方、書方及手技製作ヲ結合ス
- (二)人文科——劇又ハ戶外ベジエントヲ中心トシテ、之ニ会話、唱歌、作法、製作、描キ方及律動遊戯ヲ結合ス
- 一、一日ノプログラム

(一)見聞事項ノ報告、之ニ基ク談話

(二) 自然科、人文科

(三) 食事作法

(四) 整理(朝礼及終礼)

一、保育ニハ将ニ戸外指導ヲ重視ス

幼稚園は小学校とはちがつて教科目の規制がありませんでしたから、実際の保育の展開にさいしては、小学校よりも自由に生活単位案を実施することができたと想像されます。プロゼクト法とは、アメリカのプログマチズムの哲学を背景としてデューイやキルパトリックなどによって提唱された方法です。プロゼクト法では、子どもの活動はつぎの四段階の過程をたどるとキルパトリックはいつています。

すなわち、(1)目的をたてること、(2)目的実現の計画をたてること、(3)計画にしたがつて実行すること、(4)実行の計画を検討することです。したがって、プロゼクト法を採用するということは、子ども自身がある目的をもって作業計画をたて、それを遂行しながら学習することを意味します。具体的に、どのていどまでこの趣旨が実践されたかということは、実践記録や保育日誌がのこっていないので判然としませんが、生活単位を自然科と人文科に大別し、それぞれを総合的な大きい生活経験のなかで、いわゆる作業単元として指導したものと考えられます。

社会の領域は自然と人文のそれぞれに含まれて指導されたのでしよう。保育の実際案をたてるばあいには、子どもの創意発案する能力を養うこと、単独でまたは団体ではたらく能力を養うこと、保育は戸外でおこなうを常例とすること、校庭校舎を連続したる大作業——単位を計画すること、などの注意が付けられています。

以上のような試行の過程を経て、『生活単位ノ保育カリキュラム』が作成されていきました。これは、題目・材料・活動・成果の四項目にわけられていて、四歳児と五歳児のための年間保育計画です。それは、四月から一年間にわたって、つぎのような生活単位が配列されています。

入園当初の活動 絵本をみること いちご狩り 電車
遊び 五月の節句 お昼弁当 七夕祭り 水遊び
お月見会 お芋掘り ままごと遊び 人形遊び お客
遊び 汽車ごっこ 運動会 動物園 せいもん払い
郵便ごっこ 神明国道 果物屋遊び お正月遊び
お雛祭り

参考までに、三つばかり例をあげておきます

(次頁の表を参照)

このような生活単位による幼稚園の保育カリキュラムは、当時としては画期的な試みでした。及川平治は、明石附属小学校

題目	材 料	活 動	成 果
一 之 組 遊 び	1. オザブトン 2. オ茶椀, オ盆 3. オ菓子	1. 家人ト客ヲキメル 2. 家人ト客ノ挨拶 3. オ茶菓子ヲ出ス	1. カハリバンニスル 2. 客主ニナツトキノ心得 3. オ茶菓子ノ進メ方トイタダキ 方
二 之 組 上	1. 紙, 盆 2. 徽章ヲツクル紙 3. 椅子, 机, 花 4. テーブルカケ 5. 茶椀, オ菓子 6. 鉢, 糊, 紙	1. 盆ヲツクル 2. 徽章ヲツクル 3. 室ノ掃除, 裝飾ヲスル 4. テーブルカケヲカケ, 花ヲオ ク 5. 客主ヲキメル 6. オ客遊ビノ劇	1. キレイニツクル 2. 上手ニ折ル 3. 気持ヨイ部屋ニスル 4. 配置ヨクスル 5. 主客ノ礼儀作法 6. 恥シガラズニスル
一 之 組 汽 車 ご っ こ	1. ツ ナ 2. 停車場 3. 切符, 帽子, 笛	1. 手ヲツナイデ汽車ニスル 2. 場所, 車掌ヲキメル 3. 上り下りヲ決定スル 4. 行ク先ヲ決定スル 5. ツナノ汽車進行	1. 手ヲキラヌヤウニ進ム 2. 前ノ人ヲ押サヌヤウ 3. ミンナ降りテカラノル 4. 走リスギヌヤウ 5. 仲ヨク面白ク遊ブ
二 之 組 上	1. ヒル, ブロック 2. 切符 3. 新聞雑誌 4. 弁当, 煙草, マ ッチ 5. オ菓子, オ茶	1. 停車場見学 2. 停車場ヲツクル 3. 売店品ヲツクル 4. 汽車遊ビノ劇化	1. 駅員, 赤帽, 売店ナドノ職能 ヲ知ル 2. 急行, 普通, 往復等ノコトヲ 知ル 3. 汽車中ノ公民の知識
一 之 組 お 月 見 会	1. オ月見ノ絵 2. 七 草 3. ぬりえ 4. 粘 土 5. 栗, オダンゴノ オ供ヘ物	1. オ月サンノオ話ヲキク 2. オ月見会場ヲツクル 3. オ花ヲソナヘル 4. オダンゴ, 栗等, 粘土デ作ル 5. 月見会ヲスル 6. オ供ヘヲ試食スル 7. 兎ト月ノオ話ヲキク	1. 月ニ関スル伝説ヲ知ル 2. 粘土細工ノ時ハ衣服, 机ヲヨ ゴサヌヤウニ 3. 会合ノ時ハ, 人ノスル時シズ カニ見ル
二 之 組 お 芋 掘	1. 裏ノ芋畑 2. スコップ 3. 鍬 4. 籠	1. 芋ヅル上ゲ 2. 芋 掘 3. 手ヲアラフ 4. 後片附 5. 芋 洗	1. 作業ニ便利ナ服装ヲスル 2. 服ヲヨゴサヌヤウ 3. 芋ヲ折ラヌヤウ 4. 芋ニ関スル理科の知識 5. 道具ヲ大切ニシマフ 6. 試食

および幼稚園において、新カリキュラムの精神にもとづく實際教育を毎年全国に公開発表し、またカリキュラム改造全国講習会を主催して啓蒙に努力しました。こうして、昭和十一年三月に、三十年におよぶ明石附屬での生活に訣別して帰郷し、仙台市教育研究所長に就任したのですが、その後の明石幼稚園は、戦時中になっても生活単位の保育を基本線としてうけついでいました。このことは、『本園保育概要』（昭和十五年度）によつて知ることができます。

歴史的意義

幼稚園教育改革の試みは、一方では、大正期のおわりごろから昭和初期にかけて、東京女子師範学校附屬幼稚園を母胎として、倉橋惣三が誘導保育論という名まで全国的にすすめていきました。しかし、及川平治の幼稚園保育は、倉橋惣三の流れとは直接のつながりをもっていないものと考えられます。それは、明治中期いらいの谷本富をはじめとする新教育運動の系列に属するものでした。東基吉や倉橋惣三の幼稚園改革運動は、アメリカにおける児童研究運動や、イギリスにおける保育学校運動の影響をうけ、日本の保育界だけを対象とした、いわば保育界における新教育運動でした。

しかし、及川平治のそれは、十九世紀から二十世紀にかけて欧米におこった幅広い新教育運動の影響をうけ、明治中期から大正期にかけて、樋口勘次郎の活動主義教育、谷本富の新教育、河野清丸の自動主義教育と日本女子大学附屬豊明小学校での実践、西山哲二の帝国小学校の創立、中村春二の成蹊学園、沢柳政太郎の成城小学校における自由教育、あるいは、奈良女子高等師範附屬小学校における木下竹次の生活学習、千葉師範附屬小学校における手塚岸衛の自由教育、広島師範附屬小学校における千葉命吉の創造教育、そして、東京と芦屋につくられた野口援太郎の「児童の村」における徹底的な自由教育……と発展したはなばなしい一連の新教育運動の流れに位置するものでした。もちろん、その根源においては前者もこの世界的なうごきに発生の源をもっているのですが、わが国における新教育運動の進展からみれば、前者はむしろ後者の影響をうけ、その流れの一部としてすすめられたと考えることができます。時間的序列からみても、思想的背景からみても、及川平治の方がより早く、そしてまた新教育理論と実践について、より根本的な思考の過程を経ています。

明石附屬幼稚園における及川平治の新教育理論と実践は、(1) 小学校教育との関連のもとに幼稚園保育の理論と実践を試行したこと、(2) すでに明治四十年代から生活を重んずる保育を實踐

していたこと、(3)それを生活単位のカリキュラムにまで理論的・実践的にたかめていったこと、(4)すでに明治期から保育の科学化に努力していたこと、などの諸点において注目にあたいする価値をになっています。

わが国の幼稚園史にのこされたこのような遺産をみつただし検討することによって、わたくしたちは、わが国の今後の幼稚園の発展を有意義な方向にみちびかなければならないと思ひます。

〔資料〕

- 保育方針並ニ幼稚園内規 明石女子師範学校附属幼稚園
- 保育日誌 明治四十二年度 ”
- 幼稚園経営 ”
- 教育並保育概覧 ”
- 生活単位ノ保育カリキュラム ”
- 保育概要 ”
- 知能検査及び指針 ”
- 園児実行簡条 大正七年四月 ”
- 本園保育概要 昭和十五年度 ”
- 及川平治著 分団式動的教教育法 ”
- 分団式各科動的教教育法 ”

及川平治著 動的教教育論

三先生言行録刊行会、三人の先生

大日本學術協會、八大教育主張

” 八大教育批判

拙稿、明治後期における幼稚園改革運動 「私学研修」

第四一号

拙稿、保育学年報、一九六八、九年度

(和光大学)

日本保育学会 第23回大会開催予告

会期 昭和四十五年五月十六日(土)

五月十七日(日)

会場 京都女子大学

内容 ・講演

- ・研究発表
- ・シンポジウム 他